

II 特集 教科教育学研究の発展と展望－1967～2002－

教科教育学・国語科における研究の展開 1983-2000

広島大学大学院教育学研究科 山元隆春

キーワード：国語教育学，教科教育学，国語，日本語

〔要旨〕

1983年度から2000年度に至る広島大学大学院教育学研究科教科教育学専攻及び教科教育科学専攻における国語教育学関係の64の修士論文の内容を検討し、そこに見られる研究の展開の道筋をたどることによって国語教育学研究のなかでどのようなことが問題化されてきたのかということを探った。国語教育学研究へのアプローチを、1) 歴史研究的アプローチ、2) 授業論的アプローチ、3) 基礎論的アプローチ、4) 発達論的アプローチ、5) 比較教育学的アプローチ、6) 認知心理学的アプローチ、7) 国語科内容学研究のそれぞれに分けて論じた。また日本語教育学領域における修士論文についても、日本語教育学専攻の生まれる以前に教科教育学専攻の論文として書かれたものに関して概観を行った。以上の検討を踏まえ、将来の教科教育学・国語教育学研究の方向に関する提言を行った。

はじめに

本稿では、広島大学大学院教育学研究科教科教育学専攻及び教科教育科学専攻における修士論文を中心として、教科教育学における「国語科」の研究が広島大学においてどのように展開されてきたのかということ考察する。既に、広島大学大学院教育学研究科における教科教育学専攻の出発点から1983年時点までの国語教育学研究の展開については、本誌の前身にあたる『教科教育学会年報』において、1984年に野地潤家が周到かつ詳細なレビューをおこなっている。ここでは1983年度以降の修士論文にもとづいて国語教育学の研究の展開について考察を試みたい。

1. 教科教育学・教科教育科学専攻における国語教育学研究の軌跡

－1983年度から2000年度まで－

1983年度から2000年度までの国語科における修士論文の題目にはどのような研究の軌跡が見られるのだろうか。教科教育学専攻・教科教育科学専攻においては1983年度以降次のような修士論文が生み出されている。

- 1983 1. 植山俊宏「説明的文章読解指導の研究－指導法の検討を中心に－」
 2. 田中俊弥「戦後国語教育論の展開－国分一太郎の場合－」
 3. 戸田利彦「日本語教育における語彙指導の研究」
- 1984 4. 金 潤喆「韓国人に対する日本語教育の研究－誤用例の分析を通して－」
 5. ムリヤナ・アディミハルジャ「インドネシア人に対する日本語教授法－助動詞の諸問題を中心に－」
 6. 岡村 薫「言語生活教育論の生成と展開－西尾実国語教育論を中心に－」
 7. 山元隆春「文学教育基礎論の研究－読者論の視点から－」
- 1985 8. 難波康治「日本語教育における誤用分析に関する研究」
 9. 牧戸 章「文章表現能力の発達論的研究」
 10. 宮平政知「国語科授業実践のための個体史的研究－青木幹勇氏の読みの指導のばあい－」
- 1986 11. 池田悦子「国語科単元学習の研究－大村はま実践の考察を中心に－」
 12. 平田顕久「詩教育の研究」
 13. 森井哲也「日本語教育における語彙指導の研究－中国語話者に対する漢字を含む表現の指導を中心に－」
- 1987 14. 高野英朗「文学の授業過程の研究－〈見え〉先行方略を中心に－」
- 1988 15. 上田祐二「文学的コミュニケーションにもとづく文学教育の基礎論的研究」
 16. 瀬尾 学「児童期における文章表現能力の発達論的研究」
 17. 陳 士昌「中国語話者に対する日本語教育の研究－慣用表現を中心に－」
 18. 鄭 亨奎「中国人に対する日本語教育の研究－接続表現を中心に－」
 19. 松浦弘幹「文学体験の成立をめざす文学教育の方法」
- 1989 20. 石原 淳「文学作品の読みの過程の研究」
 21. 中西 淳「文章表現指導の研究－文章生成過程の考察を通して－」
 22. 江添真紀子「現代日本語における待遇表現とその指導に関する研究－日本語教育の観点から－」
 23. 河野正夫「日本語におけるとりたて詞の文法と意味－日本語教育の観点から－」
 24. 天満伸子「日本語の自発と受身の表現に関する研究－フランス語を母語とする学習者のために－」
 25. 林 文苑「日本語教育における文型指導の研究」
- 1990 26. 禹 燦三「日韓両国の漢字音の対照研究－日本語教育の観点から－」
 27. 住田 勝「書くことを取り入れた読みの指導の研究」
 28. 高橋由美「古典の読みを深める学習指導の研究」
 29. 福島浩介「アメリカにおける「読み」の指導の研究－「批判的な読み」を中心に－」
- 1991 30. 川野敏子「文学作品の読みの指導の研究－多様な読みの成立の問題を中心に－」
 31. 土山和久「ドイツ作文教育方法論の展開－「言語形成的作文」を中心に－」

32. 所 康俊「文学の読みの授業における集団過程の研究」
- 1992 33. 四十塚 都「高等学校における現代詩教育の研究」
34. 間瀬茂夫「国語学力モデルと授業のあり方との関わりについての研究－説明的文章の読みの授業を中心に－」
35. 水元 肇「戦後古典文学教育の研究－益田勝実氏の所論を視点として－」
- 1993 36. 河野智文「昭和二十年代前半における国語単元学習の研究」
37. 高尾香織「表現生成の場を想定する古典文学作品の読みの指導の研究」
38. 松友一雄「国語科における授業過程と評価活動の統合－文学の授業を中心に－」
- 1994 39. 上野珠貴「福岡県西部方言における格助詞の研究」
40. 丸山範高「表現の連関の意識化による読み深めの指導」
- 1995 41. 林 直紀「問いを生み情報を活用する和歌学習指導の研究」
42. 藤田修司「言語論理能力を育てる国語科授業の研究－ディベートを中心に－」
43. 矢山 仁「文学の授業における集団過程の研究－個の読みの変容に着目して－」
- 1996 44. 田代智則「自己の言語生活に関心を持たせる指導の研究」
45. 前田直彦「説明的文章教材の史的研究」
46. 森 智子「国語科授業改善のための形成的評価の研究」
47. 守田庸一「評論文の読みの内的過程に関する研究」
- 1997 48. 鎌田高明「『経験化』に着目した国語単元学習の研究」
49. 田口裕美子「新古今時代の和歌詠作についての研究－慈円・定家「文集百首」の検討から－」
50. 真木昭久「作文教育における「書き直し」の内的過程の研究」
- 1998 (この年度より「教科教育科学専攻」)
51. 北崎貴寛「漢詩における学習者の〈読み〉に関する研究」
52. 木村香織「高等学校読書指導の研究－高校生の読書意識の分析と考察を通して－」
53. 小樹雅典「語りの構造を踏まえた読みの授業に関する研究－古文の授業構築を中心に－」
54. 下前知義「詩の授業における学習の研究－学習者の読みに着目して－」
55. 武久康高「『枕草子』の言説空間－雅言説を中心に－」
- 1999 56. 伊東大介「漢文の授業に関する研究－『史記』『項羽本紀』を中心にして－」
57. 伊藤美紀「書くことにおける構想指導についての研究」
58. 伊藤裕介「詩の読みの指導における授業コミュニケーションの研究」
59. 棚田真由美「古典教材史研究－「古事記」の場合－」
60. 原 一浩「広島県内の高校生における動詞活用型の変容に関する実証的研究」
61. 山田由紀子「高等学校における対話能力育成に関する研究」
- 2000 62. 厚母充代「『問題領域』の問い深めを軸とした古文学習」

63. 真部奈美 「『徒然草』と王朝一言説論的視座から」

64. 宮本浩治 「文学の授業に関する基礎論的研究」

ここに掲げた64本の修士論文がどのような研究主題を掘り下げたものであるかということを以下に検討しつつ、教科教育学における国語教育学研究が取り組んできたことを考察したい。

2. 国語教育学研究の展開

2.1 歴史研究的アプローチ

国語教育学研究の重要な一つの柱に歴史研究的なアプローチがある。2の田中論文は主として生活綴方教育運動において理論的主導者であった国分一太郎の国語教育理論の形成過程に光を当てて、それを丹念に掘り下げていった論文である。6の岡村論文はこの田中論文と表裏を為している。岡村論文は田中論文が光を当てた国分一太郎とほぼ同時期に国語教育学の基礎をかたちづくった西尾実の理論構築の過程に光を当てた。「言語生活教育論」と名づけることのできるその理論構築過程に光を当てることによって戦後国語教育がめざしたものを、田中論文同様跡づけていったところに特色がある。国分と西尾が国語教育理論を展開したのとほぼ同時期に新制中学校の国語教師として国語単元学習の開拓に取り組んだ大村はまの授業実践を詳細に検討した11の池田論文もこの方向での研究の成果である。田中・岡村論文とは異なり、池田論文は一人の国語教師が戦後の新しい教育理念のもとに構築した授業実践の成果を検証したところに特色がある。

2.2 授業論的アプローチ

1の植山論文は「説明的文章」の読解指導について小松善之助、大西忠治、青木幹勇の三氏の指導法の比較検討を行ったものである。個々の指導法の特徴を掘り下げながら、説明的文章教材の読解指導のめざすものは何かということに関する究明をはかった。国語科授業の前提となる指導理論の諸相を、とりわけ指導法の開拓の歴史が比較的浅い説明的文章教材に関して行ったところに大きな特色があると言ってよい。

10の宮平論文、12の平田論文、14の高野論文は、それぞれ国語科の「授業」に焦点を当てた研究である。宮平論文の場合は、青木幹勇という一人の国語教師の読みの授業の深化のもようを個体史的に跡づけながら、国語科の授業実践を推進していくために必要なことがらを検討した。平田論文は主として現代詩の授業における取り扱いを、詩教育に関する先行理論と先行実践の文献を中心として検討し、実践を営む上での課題を鮮明にしたところに特色がある。33の四十塚論文もこの平田論文と同じく、高等学校での現代詩の授業構築の条件を探ったものである。高野論文は、文学の授業におけるテキストの「視点」の扱いに焦点を当てながら、認知心理学者宮崎清孝が問題化した読みの授業における「〈見え〉先行方略」の役割について理論的な検討を行いつつ、実際に授業実験を試み、授業において教師が用いる方略としての「〈見え〉先行方略」の価値を明らかにした。指導法の比較検討を行った1の植山論文とあわせて、1980年代前半におけるこれらの研究は「授業」

に焦点をあわせた国語教育学研究の新しい展開を切り開いたものと位置づけることができる。

2.3 基礎論的アプローチ

7の山元論文は、15の上田論文と同じく文学教育の「基礎論」として、それぞれ読者論・読者反応理論、文学的コミュニケーション理論に光を当てた論文であった。教育研究に多くの示唆をもたらすと思われる理論を読み解き、それを文学教育の基礎論（基礎理論）として位置づけていこうとする試みである。この問題は27の住田論文、30の川野論文に引き継がれていく。27の住田論文は認知科学者ロジャー・シャングの理論に依拠しながら、「読むこと」に対する認知心理学的なアプローチを志向した研究である。また30の川野論文は、住田論文と同じく認知心理学・認知科学領域における研究方法論に示唆を得て、文学作品の読みの過程に関するモデルを構築し、国語教室において生み出される読みの動的過程を解明しようとしたものである。川野の場合はレアード＝スミスのメンタルモデルに依拠している。認知心理学の研究に影響を受けている点では国語科授業理論の研究を試みた14の高野論文も同じである。58の伊藤論文、64の宮本論文も基礎論の研究としての側面を持つが、高野論文と同じように新たな授業理論構築への志をそなえたものである。

文学作品の読みの過程を扱った研究としては20の石原論文がある。石原論文は、現代の言語学や批評理論において重視されてきた読みの「CONVENTIONS」（約束事、慣習）を取りあげ、これが読者の読みに及ぼす影響を論じた。「CONVENTIONS」を授業のなかで意識的に扱うことによって、学習者の読みが促進されるとした。

2.4 発達論的アプローチ

こうした「授業」および「基礎論」に焦点を当てた研究と同様に、1980年代に営まれた研究のなかでとくに注目されるものは、「発達」の問題に光を当てた実証的な研究である。9の牧戸論文は1980年代におけるいち早い実証的研究の成果の一つである。牧戸論文は児童の文章表現能力の発達のすじみちを詳らかにするために、これまでの理論的・実証的な発達研究の成果を検討し、公立小学校において調査研究を実施し、そこで得られたデータの分析をもとにして文章表現能力発達のすじみちに関する仮説を検討した。16の瀬尾論文も、牧戸論文と同じ方向での研究である。瀬尾論文の場合は児童の文章表現能力の発達を規定する要因を詳細に検討しながら、その発達のモデル化を図ったところに特色がある。

こうした文章表現能力の発達に光を当てた研究の展開を背景としながら、児童の文章生成の過程に注目したのが21の中西論文である。認知心理学の文章生成過程の研究に示唆を得ながら、子どもがどのように文章を生み出していくのかという問題の解明に取り組み、文章表現指導の基礎理論を構築していこうとしたところに中西論文の大きな意味がある。この中西論文の提起した問題が、後に50の真木論文、57の伊藤美紀論文に継承されていくことになる。真木論文は文章表現における「書き直し」の過程に光を当て、伊藤美紀論文は「構想指導」段階に光を当てた。ともに、文章表現における再構成のプロセスで子どもの内に生じることがらに焦点化した研究である。中西論文と

あわせて文章生成の鍵を解くことを志した研究であり、文章表現指導の基礎理論を形成する研究であると位置づけることができる。

2.5 比較教育的アプローチ

1982年度以前の国語教育学における修士論文で多くの人に取り組んだ比較国語教育研究（外国の国語教育研究）に関しては、以前ほど多くの論文は見られなくなっている。29の福島論文がアメリカ合衆国の読むことの教育を、31の土山論文がドイツにおける作文教育を、それぞれ扱っている。福島論文、土山論文ともに、これまでの広島大学における比較国語教育学研究の蓄積を踏まえながら、各々の国における読むこと・書くことの教育及び研究において重要視されてきた問題に取り組む、その現代的課題も含めて考究を進めた。いずれも、わが国の国語教育における諸課題に対する問題を十分に意識しながらの研究であり、「記述」から「比較」への志向性をそなえた研究であると言いうことができるだろう。

2.6 認知心理学的アプローチ

国語教育基礎論における「読み」の問題の追究と国語科授業理論の研究において主題化されてきた問題の双方を意識した研究も少なからず生み出されるようになった。32の所論文、34の間瀬論文、38の松友論文、43の矢山論文、47の守田論文、51の北崎論文、54の下前論文、56の伊東論文、58の伊藤論文、64の宮本論文などがそれである。これらの論文においては、国語教育基礎論の研究において個人内の活動としての把握が試みられていた「読みの過程」を、国語科授業という場ないし文脈のなかで考察することがめざされている。これらの研究は言うなれば国語科授業における状況的認知 (situated cognition) の研究であると位置づけることができるだろう。それは、教室という状況のなかでの個人内・個人間の相互交渉が、学習者の読むことの学習に何をもたらすのかということの解明しようとする研究である。このような研究が今後の教科教育学・国語教育学においては重要な意味を持つ。そして、その前提に1980年代半ばから始まる認知心理学的アプローチを採用した国語教育研究における試行錯誤があることも確かである。

2.7 国語科内容学研究の進展

39の上野論文が、教科内容学として、国語教育学専修においては最初の修士論文である。日本語教育領域での多くの論文が扱っている日本語の問題を「福岡県西部方言」の「格助詞」に焦点を当てて扱ったものである。この上野論文以降、国語科内容学の領域においても多くの研究が進められることになった。同じ現代日本語を扱ったものとしては60の原論文がある。現職の高等学校教諭として大学院での研究に従事した原の論文の場合は、高校生の現代語学習の基礎を為す仕事として、言語地理学の方法論に学びながら、高校生自身の使用することばを調査し、その実態を把握する研究を行った。上野論文・原論文ともに、高等学校国語科における現代日本語の扱いに対して大切な示唆を与える論文であり、とりわけ「現代語」の教育内容を見極めていく上で重要な意味を持つ。

国語科内容学の領域においては古典（古文・漢文）に焦点を当てたものが多い。49の田口論文は慈円・定家の『文集百首』に、51の北崎論文は漢詩教材に、56の伊東論文は『史記』及び『漢書』『項羽本紀』に、55の武久論文は『枕草子』に、59の棚田論文は『古事記』に、62の厚母論文は和歌教材に、63の真部論文は『徒然草』に対象を設定して進められた研究である。いずれも中学校・高等学校における古典教育の内容をどのように構成していくのかということ強く意識した研究である。また、53の小樹論文は、60の原論文と同じく現職高校教諭の大学院生として、古文の授業構築の実際的問題に取り組んだものである。とくに古文教材の「語りの構造」に焦点化し、そのことを学習者の読みを活性化するための手がかりにしようとしたところに特色がある。また、28の高橋論文は古典教材の読みの深化過程に焦点化しつつ、古典作品の教材化と授業構築のあり方を問うものであった。

古典に焦点を当てた国語科内容学に関する諸論文は、「古典」と呼ばれるテキストを丹念にとらえながら、それらを古典テキストとして成り立たせている諸力の作用を、重層的なかたちで描き出そうとしているところに特色があると言ってよい。

2.8 日本語教育研究の展開

日本語教育研究分野での、3の戸田論文、4の金論文、5のムリヤナ論文、8の難波論文、13の森井論文は、それぞれ語彙指導、誤用分析、助動詞の指導法、に光を当てて、日本語教育を行っていく上での実際的な問題を扱ったものである。いずれも、日本語を母語としない学習者に対する日本語の指導の実際における諸課題を克服するために、切実に要請されていることがらに光を当てた研究であった。戸田論文と難波論文はそれぞれ日本語教育研究の立脚点を探りながら、その方法論的基礎を確立することを目指した研究である。金論文は韓国語話者、ムリヤナ論文はインドネシア人、森井論文は中国語話者にそれぞれ焦点を当て、各々の母語との関係の上で日本語習得上の問題点を掘り下げ、その学習指導上の困難点の克服を目指しているところに大きな特色がある。

日本語学（伝統的には「国語学」）に基礎を置きながら、日本語教育の対象言語としての日本語を、従来の枠組みを超え、近來の言語学の知見に基づきつつ分析・考察し、それを日本語教育の現場で生かしていこうとする志を持って営まれた研究も見られる。17の陳論文、18の鄭論文はそれぞれ中国語話者に対する日本語教育実践の上で問題とされる、日本語の「慣用表現」及び「接統表現」を中心に考察を加えたものである。同様に、22の江添論文、23の河野論文、24の天満論文、25の林論文、26の禹論文は、それぞれ日本語における待遇表現、とりたて詞、自発と受身表現、文型、音声という各々の局面に光を当て、日本語を母語としない者の日本語習得上の困難点を解消するための知見を示している。天満論文はフランス語を母語とする者に、また、禹論文は4の金論文と同じく韓国語を母語とする者に焦点を当てて、その日本語習得上の問題を扱っている。

3. 修士論文の主題からみた国語科教育研究の展開

この15年余の国語科における修士論文で扱われた問題を概観して強く感ぜられるのは、各々の研究で用いられたアプローチに、教育を扱う諸学のパラダイム・シフトの影響が如実にあらわれているということである。1980年代はじめの研究には、従来の歴史研究的アプローチ（国語教育史研究）や比較教育学的アプローチがみられるが、1980年代後半になると、認知心理学的アプローチがみられるようになり、その認知心理学的なアプローチも、表象主義的なそれ（住田論文に代表されるもの）から、状況論的なもの（松友論文に代表されるもの）や社会構築主義的なものへと次第に変化を遂げてきている。もちろん、状況論的アプローチを採用した研究が最善のものかということと必ずしもそうは言えないだろう（福島正人『暗黙知の解剖』金子書房2001など参照）。しかし、国語教育研究における関心の中心が、個人の内面に成り立つ国語学習の姿を解明することから、次第に個人と集団との間に成り立つ学習、すなわち個人間の交渉によって成り立つ国語学習の姿の解明へと移行してきたということ是可以する。言うなれば、近年の国語教育研究の多くは、そのような研究上の関心の中心の移動を果たしながら進展してきているとすることができる。

3.1 ディシプリンの境界と国語教育学

ディシプリン（学問領域）の境界線がかつてほど明確ではなくなった（かにみえる）今日、このことは不思議なことではない。むしろ、「教科教育学」がその発足当初から問い続けてきたことは、今後新しい「文化教育開発」「言語文化教育学」という皮袋こそ変わっても、依然として生き続けるはずである。そもそも、「教科教育学」自体が学際的な学問として出発してきたという経緯があり、その意味で周辺諸科学の影響を免れることはできず、当然のことながら周辺諸科学の進展の影響を被ることもなる。

「教科」は「学問」のミニマム・エッセンシャルズなのか、それとも「学問」とは異なった何かなのか。「学問」が文化を解明するために必要なものであるとするなら、「教科」はそこからまったく切り離されたものではない。しかし、「教科」という枠組みが中等教育段階までの諸学校における学びを前提としている以上、それは高等教育における「学問」の教授とは異なるものである。初等・中等教育において「教科」とはいったい何か、子どもにとって「教科」学習はどのような意味で必要なのかという問いを、私たちは抱き続けていかななくてはならない。「国語科」という教科は「国文学（日本文学研究）」「国語学（日本語学）」「漢文学（中国文学）」「書字学」といった諸学のミニマム・エッセンシャルズではない。諸学を基礎にしながらも、それとは別個の何かとして成り立っているものが教科である。不即不離の関係にはあるが、しかし教科に固有の論理を解き明かすところに教科教育学という試みの基盤があったことも確かである。

ディシプリン（学問領域）とサブジェクト（教科）との関係をさらに深く掘り下げていくということ、それは、教科教育学にとって重要な課題であり続け、現在にあっても重要な課題である。教科を教える教師を育てていくということが教科教育学の一つの役割であるとするなら、ディシプリンの

どの部分が教科学習の中身となるのか、ということは今こそしっかりと見極めていかななくてはならないだろう。その意味で、「教科内容学」として進められてきた研究をいっそう充実させていく必要が国語科においても依然としてある。

3.2 コミュニケーション・メディアあるいは分離と結合の哲学の構築

国語教育学は、私たちの「心的表象」と「公共的表象」とのかかわりを言語を介して捉えていく学問であると言えるだろう。「公共的表象」を代表するのが国語教科書であり国語教材と呼ばれるものである。対して、話し言葉や書き言葉によって私たちは自らの内部の「心的表象」を表現していく。そのような「表象」がいかにか構築されるのか。すでに存在する「文化的表象」がいかなる感染力をもって、心的・公共的両様の「表象」を構築していくのか。そしてそれはなぜか。多少守備範囲は広がってしまうとしても、このような問いを内に宿しつつ行われる研究が求められている。しかし、少なくとも国語教育学においてはまだ十分なたちでは営まれていない。

広い意味で、国語教育学は国語という「コミュニケーション・メディア」（正村俊彦『コミュニケーション・メディア』世界思想社2001）の構造と機能を対象にした学問であると言うこともできる。このコミュニケーション・メディアが私たちの内部にあるいは私たちの間にいかなる表象を生み出していくのか、という問いに依拠していくことのできる研究を切り開く必要がある。「読むこと」の教育の研究に例をとってみても、それは文章教材と呼ばれるコミュニケーション・メディアを媒介とした読書行為を学習者に営ませることの意味を掘り下げていく研究であると定位することができよう。「文学」と呼ばれる文章と「説明的文章」と呼ばれる文章とは、それぞれのコミュニケーション・メディアとしての性質という点からみていかなる違いがあるのか。そしてそれらを「読むこと」は人間の成長・発達にとっていかなる意味があるのか。このような問いかけに答えていくことのできる研究を推進する余地はまだまだ残されていると言ってよいだろう。あるいは「書くこと」を通じて私たちはコミュニケーション・メディアとしての書き言葉をどのように用いることができるのか。コミュニケーション・メディアとしての書き言葉の特性を生かすためにどのような技能を身につけさせればよいのか。コミュニケーション・メディアとしての話し言葉の働きを生かしながら会話能力をどのように学習者の内部に育てていくことができるのか。それはいわゆる社会性の発達とどのような関係があるのか。このような問いかけに依拠することのできる国語教育学を私たちはめざしていかななくてはならない。

3.3 新たな「国語科授業学」の構築

「授業」は「教科」の内容を実現していくための根幹を為す媒体である。この意味で、「授業」に対する生態学的なアプローチや社会構築主義的アプローチを探っていく営みや、「授業」づくりに国語教育学の知見を反映させていくアプローチは、必須のものとなる。「文化教育開発」は、もちろんカリキュラムのことを扱うカテゴリーのようにも見えるが、文化を伝達、共有する媒体としての「授業」の内実を多角的に捉えていくことの方が、むしろ中心になりはしないだろうか。もし

そうであるとすれば、これまで積み重ねられてきた「教科教育学」研究の内容は、そのための恰好の手がかりとなるだろう。廃れたり、捨て去ってしまうものではないし、そうであってはならない。

3.4 「国語文化」の学の構築

教科内容学としての国語科内容学については、別の問いも成り立つ。「文化教育開発」というときの「国語文化」の学とは何かという問いである。この点は「教科教育学」の場合よりも、いっそう根源的な探究を必要とする状況となってきたのではないだろうか。「教科」という枠組みを取り払った上で、なお「国語文化学」は可能なのかということである。これは、学問領域としての問いというよりも、「教育」ということをつよく意識した枠組みとして捉えていかななくてはならないだろう。わけでも、「国語」にかかわる「文化的表象」を扱う学問として、である。この国語文化表象とでもいうべきものの学問が成り立ちうるかどうかということが、「国語文化学」が成り立つかどうかの鍵である。その意味で上に概観した「国語科内容学」の修士論文において追求されてきた日本古典文学の「言説」を対象とする研究（55武久論文など）は一つの方向性を示していると言えるだろう。

それはまた、「国語」教育研究とは何かという問いをも喚起する。「日本語教育」に関する諸研究は、教科教育学という枠組みのなかで少なからず展開されてきた。これは、「国語科」の枠のなかで二系統の研究が営まれてきた、というふうにも捉えることができるだろうが、こうしてこれまでの研究の展開を眺め渡してみると、そのような捉え方とは違った捉え方ができる。「日本語教育」に関する研究が教科教育学・国語の枠のなかで営まれてきたということは、「国語教育研究」の意義を問い直す重要な契機でもあったのではなかっただろうか。「国語」と「日本語」との間にあるもの、をそれは考えさせる。

と同時に、「国語文化」とは何か、「国語」教育とは何かということを改めて考えていく契機ともなる。「国語」「国語文化」を対象化し相対化しつつ吟味・検討していく研究がそこでは必要になるのである。これは、「教科教育学」「国語教育学」の枠組みの中で従来から営まれてきたことを、いったん「他者」化していくということを意味している。もちろん、私たちはこの枠組みの研究をこれまで営んできたのであり、これからも営んでいかなければならない。しかし、「教科教育学」「国語教育学」の内側に身を置きながらそれを「他者」化していくという一見困難な作業を伴うものとして、これからの研究を構想していくということが、従来の研究を生産的なかたちで継承していくということになるのではないだろうか。なぜなら、私たちに取り組む研究は、在来の文化を継承し保存していくという意味合いと、在来の文化と対決しながら学習者の側に文化をかたちづくっていく道筋を明らかにするということにその大きな使命があるはずだからである。

言語文化・国語文化の教育とは何か。それが文化教育開発という共通の下地のもとに、どのような図絵としておさまるのか。あるいは、文化教育開発という下地は、そのようなこともゆるさない、かりそめのことでしかありえないのか。そこのところをしっかりとみきわめていかなければならない。

おわりに

国語教育学という枠組みは、広い意味での教育を念頭に置いたネーミングであり、学校教育に限られたものではない。しかし、それはやはり生涯の早い時期における国語文化の教育の意義と価値を考えていくためのプランチであると言うほかないだろう。生涯のより早い時期の教育に携わる専門職をより多く生み出していくデパートメントを構成し、教育を行っていかなくてはならない。

「教科教育学会」と「教科教育学科」が問うてきたのは、そのことだったのではないだろうか。しかし、国語教育学という学問領域を改めて対象化しながら、それを関連諸学との関係において再構築するという仕事はこれからに託されていると言ってよい。新しい学に取り組むために、そのことから問いはじめなければならない。

(2002年1月30日受理)

[Abstract]

Development of Research in the Teaching of Japanese Language and Literature 1983—2000

Hiroshima University Graduate School of Education

Takaharu YAMAMOTO

In this paper, some considerations on Development of research in the teaching of Japanese language and literature was presented. Several approaches for research in this area were indicated by analyzing the contents of M.A. thesis in the Graduate School of Education in Hiroshima Univ. Directions and possibilities of future studies in this discipline were discussed in the concluding part of the paper.